

文学大会「詩」 小中学生の部

(優秀) 小学生の部

ランドセル

水戸市立下大野小学校 二年 新井 現正

ドンドンドンドコ
あるいてると音がする
中でぶんぼうぐまつりを
しているのかな
どうして音がする
きつとぼうらをまつりにさそってる

【講評】

ランドセルの音を太鼓の音で表現することで、元気な登校の様子が伝わります。また、「まつりにさそってる」と喻えて、学校生活にわくわくする気持ちを上手に表現しています。

地域の声

水戸市立内原小学校 六年 大畠 綾夏

私は見る 雲の流れを
私は見る 木々のゆれを
私は見る 田んぼの動きを
地域の声に耳をすませると
毎日毎日がってくる

私は聞く せみの鳴き声を
私は聞く 雨の歌を
私は聞く 鳥の声を
地域の声に耳をすませると
毎日毎日がってくる

その風景の中を歩くのが
私の楽しみ

【講評】

小学生の目線で見ると「地域」Ⅱ「自然」なのですね。題名と内容のギャップが新鮮でした。地域を見ながら、声を聞きながらの散歩は、とてもぜいたくな時間ですね。三連目のまとめがとても上手です。

季節で変わる人気者

水戸市立内原小学校 六年 久保田 璃音

あの人は 桜木さん
かわいいで 有名で 人気のある人
でも 春が終わると へやにこもってしまう
だけど次の人気者が来る
名前は 緑木さん
優しいで 有名だ
温くて ここのいい人だ
だけど桜木さんと同じで
緑木さんも 夏になるとへやにこもる
また 次の人気者が来る
名前は 秋木さん
ファッションせんすが いいことで有名だ
よく着る服の色は 赤色と黄色だ
だけど緑木さん達と同じでまた
秋になるとへやにこもる
また 次の人気者が来る
名前は 冬木さん
白くてきれいなかみが有名だ
そして冬木さんも冬になると へやにこもる

そして私は行く あそこに
そして私は ついた あの場所に
いつもきれいな 景色を見せてくれる
あの人達の所に あの木の上に
雨がふっても 風がふっても
優しくて温くてかわいくてきれいな
あの木達の所に

【講評】

四季それぞれの名前を付けて、まるで木が四人の人間であるかのような表現が楽しい詩です。璃音さんは、大きな木をイメージして書いたのでしょうか。それとも身近にモデルとなる木があるのでしょうか。気になります。

夏雨

水戸市立内原小学校 六年 鈴木 リこ

夏の空からキラキラと
落ちてくるのは

夏の雨

白い雲と 黒い雲

かきなりあつて

雨落ちる

夏の空からガラガラと

落ちてくるのは

夏の雨

黒い雲が通りすぎ

青い空に

夏の雨

【講 評】

夏の軽やかな雨を、七五調のリズムと合わせて表現できました。白い雲のところ、黒い雲が現れ、それが去って、また青空が出てくるという、夏らしい空の様子をよく見ていましたね。連を上手に使えました。

(優秀) 中学生の部

夏から秋へ

水戸市立第一中学校 一年 岡本 蒼芭

雨の日は
ムシムシする
くもりの日も
ムシムシする
晴れの日
なおさら暑い
そんな夏が
何日も続いた
はやく終わって
くれればいいのに

今日は夕方に
散歩に出てみた
少し風がすずしかった
ムシムシした夏が
終わるきがする

【講 評】

短い言葉で改行することで、天気や気温、湿度の状況を端的に伝える工夫をしています。「はやく終わってくれればいいのに」というつぶやきは、地球温暖化が進んでいることを、多くの人が肌で実感している本音ですね。その暑さにも陰りを感じるようになり、ほっとした気持ちに共感できる詩です。

太陽

水戸市立第一中学校 一年 倉岡 桃花

ぼくがみんなの前に姿を表すと
みんなが目を覚ます
ぼくがみんなの前から姿を消すと
みんながねむりにつく

ぼくが元気の日
みんなが外に出て笑顔を見せてくれる
ぼくに元気がない日は
みんなが家の中に居てさみしそうな顔をしている

やっぱりぼくは
みんなの前に出て
みんなの笑顔が見たいな

【講評】

「太陽」を「ぼく」という一人称で描いているので、読み手の視点は太陽と同じですね。太陽は、「みんな」の様子を見て、「みんなの笑顔が見たい」という優しい気持ちになっているようです。太陽の存在は、人々に活力を与え、太陽自身もその喜びを感じているのかもしれない、とかわせる詩です。

今を大切に

水戸市立第二中学校 一年 根本 悠人

今を大切に
一生一回
来世はあるけど
来世は最悪かもしれない
一日一日
一秒一秒
大切に。

悲しいこと
悔しいこと
あるのは当たり前
でもそれは
大事な大事な思い出
人生が終わるとき
悲しいこと、悔しいことは
最大の財産になる

【講評】

「今を大切に」生きたら、来世はどうなるかなと、考える人は多いでしょう。「悲しいこと 悔しいこと」は、人生にとって「最大の財産」であると、作者は言い切っています。この財産は、自分を成長させてくれる大事なものだと言えます。失敗してもいいんだよ、という人生へのエールを感じます。

今

水戸市立第二中学校 一年 望月 香歩

今、私は考えている。

考え終わったとき、さっきの「今」は「過去」になった。

今は過去になり、未来は今になる。

当たり前だけど、不思議な感覚になる。

永遠の「今」なんて存在せず、すごいはやさで

未来へ走っている。

私も未来へ走る。今の世界と共に。

【講評】

改めて、時計で一秒を確認すると、その速さに驚かされます。それと同じように、現在はずぐに過去になり、未来が現在になっていく、という目まぐるしい日常を描いています。「私も未来へ走る」という言葉は、過ぎ去っていく時間とともに、希望に向かって自分の歩みを止めない、という姿を描いています。

(佳作) 小学生の部

すいぞくかん

水戸市立下大野小学校 一年 平戸 勇滋

すいぞくかんで

あざらしにあったよ

はんかちひらひら

ボールぼんぼん

あざらしてかてか

たのしいなつやすみ

風りん

水戸市立上中妻小学校 五年 近藤 宗一朗

夏は風りん

チリリン響く

凜々しい声

ぼくは生きる

水戸市立下大野小学校 五年 伊藤 颯真

ぼくは生きる
どうなっても生きる
それが宿命だから
もししんでも
来世でまた生きる

ぼくは生きる
それが生き物だから
楽しい時は
走り回る
つまらない時は
空を見る

感情はいっぱいあるけど
それも生きていないと感じない
だからぼくは生きる
ずうっと生きる
えいえんに
ぼくは生きる

たいくつ

水戸市立下大野小学校 五年 桧山 慶多

たべる よろこぶ 生きる
あそぶ かなしむ 生きる
ねる おこる 生きる
たべる よろこぶ 生きる
あそぶ かなしむ 生きる
ねる おこる たいくつ

たいくつ
よろこぶ ねる
たべる おこる
あそぶ たいくつ
たいくつ たべる

かなしむ 生きる たいくつ
ああ明日は何しよう
たいくつ

(佳作) 中学生の部

睡眠

水戸市立第二中学校 一年 伊藤 巧

みんなが寝れば
一時の
世界平和が始まる
なぜかって
寝ながら環境破壊や争いは
できないだろう
だから、ぼくが考えるに
人や動物が睡眠をするのは
一時の地球への
安らぎをあたえるためだろう

マツ

水戸市立第二中学校 一年 小森 こころ

群青の下
ガラス瓶から
透き通って見えてくる
世界のほんの一部
この地で最初に目に留まった
小さい一本のマツ
きつとまだ
成長過程だ
私と同じだね
一緒に成長していこうよ

プリン

水戸市立第二中学校 一年 千歳 真柚子

黄色いワンピースを着た子は
まるでほっぺのような
ぷるんぷるんで
笑顔を
とどけてくれる

黄色いワンピースを着た子は
甘い甘い
やさしい味で
幸せを
とどけてくれる

黄色いワンピースを着た子は
なくなってしまうけど
なくなった分だけ
笑顔いっぱい
花がふえるのだ

風の聲

水戸市立第二中学校 一年 渡部 月子

風の声が聞こえる、
人の声が聞こえる、
草木が揺れる音が聞こえる、

太陽の光が眩しくて、太陽に手をかざす。

体で風を受けとめて、
色んな聲を聞きながら、歩く。

文学大会「詩 一般の部」

優秀（第一位）

みどり信号

橋本 花梨

みどり信号という言葉は無いらしい
どう見ても進む信号は緑なのに
みどり信号という言葉は無いらしい

おばあちゃんは僕のカバンをみどりと言う
遠足の前に買って貰った
ブルーでかっこいいカバン
それを見ていつもみどりと言う

今日もいい天気だ
晴れて雲一つない青空が広がっている

さあどこへ行こうか 進もうか

みどり色の信号が輝いた瞬間
僕は一步を踏み出す

その先の景色は何色だろう
その先の未来は何色だろう

【講評】

道路の〈青信号〉は、〈みどり〉色に見えるけど、皆が言っているから〈青信号〉と言っているだけ。同じように僕の〈カバン〉も、皆が〈ブルー〉と言っているけれど、〈おばあちゃん〉にとっては〈みどり〉なんだ。そう見えるからだ。名前は、物の実体にあるのではなくて、皆が言うからそういう名前になったということだろうか。そう思うと気が楽になる。楽しくなる。空の色も、すべて皆が言っているように青色で縛り付けないで、自分がどう見るかで色々な色になる。未来の世界が何色になるか。人それぞれの自由だ。

優秀（第二位）

鳥かご

大越 宏志

昨晚の煩わしさを身ごもった
鳥かごの中の僕は
けつきよくこの場所へ来てしまった
街の遠吠えをかき消していく
静寂の中で
誰も知ることのない鳥かごの様子を
飼育される街が明かす
寝起きの悪いビルが立ち並ぼうとする
白日の鳥かごは
何時の間にか片付けられてしまった
寝具のつぶやきを聞く
消された電信柱に
止まり木のない夜が
思いも寄らない戸口から
中の様子をあらわにすると
暁の夜に用意された
裁縫用具を
身支度におわれた日の出の中に
思い出し

止まり木のない鳥かごの中に
作られる
新たな街並みを
仕立て上げらせようとする
身ごもった昨晚の煩わしさが
裁縫用具に通される
最後の糸を探している

【講評】

〈鳥かご〉の中にいる〈僕〉のイメージは何を意味するのでしょうか。出口もなく、休息する〈止まり木のない〉場所。閉ざされた作者の心の風景のようですね。〈消された電信柱〉には、明かりもなく、通信手段もない孤独な心の街の不安な夜が表されているようです。しかし、夜が明けると、そこに〈裁縫用具〉のイメージが浮かび上がります。作者は、それで新たな衣服を仕立てようとしています。新たな意匠を織り込んだ新しい人生を作ろうとしています。夜の幻影の中から〈最後の糸〉、一条の希望の光。それが〈鳥かご〉からの出口でしょうか。

優秀（第三位）

手紙

坂場 和美

目を閉じると 「ああもう一年経った」
そう感じると ほんのり胸が痛む

目の前で苦しんでいるのを
ただ見つめることができなくて
冷たくなっていく手を

にぎるしかなかった

「連れていけないで」と何度も祈った

でも 突然 別れはやってきたの

私の大切な人達は みんな

いなくなってしまう

「なんでなの？」

最後のお別れの日

みんなは 涙を流していたけれど

私だけは 泣けなかった

心が凍り付いて からっぽで

いなくなったことが 受け止められずに

なっていて…

「別れ」を 受け入れるのは

こういうことなのだと 時間をかけて

いくのだと 分かってきた

一年経って 笑顔の遺影の写真を見ると
存在の大きさを かみしめると
「会いたい」という気持ち
がわいて どうしようもないけれど…

ようやく 一人でいる時間も
楽しめるように なったの

後悔しないように 一日を大切に

して がんばっています

天国で 今、何をしていますか

叶うことなら お父さんの声を

聞きたいです

「甘えるな」と 怒られるかもしれ

ないけれど

【講評】

「手紙」は、天国へ行ったご主人への手紙なのです。病が快癒するように必死に祈る姿や、それもかなわずお別れの日、涙も出ないほどの悲しみ。やがて悲しみはやわらぎ、日常が戻っても、会いたい気持ちがどうしようもなく湧いてくる。大切な人を失った人の心情が克明に、切々とつづられていて、胸を打ちます。夫の姿を目に浮かべながら、語りかけるように手紙を書く作者の姿が目に見えるようです。

佳作

敗戦

夏空は遠く眩しく

青く澄み

見上げればまた無言の悲しみ

七十九年 ふり向かず 人過ぎ去る

風絡む水府橋に立ち 那珂川の流れ

上流と下流 交互に 傾ける音

飽きもせず止まり知らぬ 時運び去る

悔しさに俯いたまま言葉なく

堪える日々は白熱電球の下

食えぬ日を黙り

辱しめを耐え

老いる人 尚語らず

記憶おぼろに

遠い夏の日

田口 敏

佳作

君の“声”を聞かせて

いつも校庭のブランコに座る君

話し掛けても知らんぷり

夕暮れの空を見つめていた

おばあちゃんに飴をもらったから

あげようと思つて

今度は笑顔で話し掛ける

これ、あげる

“ありがとう”

聞こえないし

話せない

閉じた世界に一人ぼっち

“耳、聞こえないの？”

“うん”

水野 充貴

飴を頬張りながら
二人、ブランコをこいでいた
無言だった

覚えてたての手話が

少し役に立ったけど

行ったり来たりを繰り返し

すれ違いながら

僕たちは結局

何も出来なかった

小学校を卒業した僕たちは

違う学校に進んだ

スマホなんか無くて

あっても役に立たなくて

知らず知らずに

僕たちはそれぞれの道を歩み始めた

今、君はどうしているのだろう

もし会えるなら

君の“声”を聞かせて